

はしがき

「私たちが生きている限り、かかわり続ける法である社会保障法を、できるだけ、難しくないように、かといって易しすぎないように、学生に伝えたい」。これがこのテキストの中心となっている考え（コンセプト）である。そのため、一般的な社会保障法のテキストに採られる手法である、分野別の記述ではなく、「生まれてから亡くなるまで」、それぞれのライフステージに合わせて、記述することとした。

したがって、本書は、従来のテキストとは異なり、やや体系的ではないかもしれない。そこで、各章においては、取り扱う内容の枠組みや制度がどのような目的で作られているのかという節と、実際に利用するときにはどのような手続（フロー）がありどのような給付やメリットなどがあるのかという節で構成した。なぜその制度があるのか、どんな目的なのかを理解できれば、学ぶ上での助けになるだろうと考えたからである。体系的な学びに慣れている法学部の学生にとってはちょっと面食らう構成かもしれないが、新たな社会保障法の側面を学ぶためにも、法学部の学生はもちろん、それ以外の学部の学生にもぜひ手に取って欲しい。

さらに、本書は、社会保障法の大きな特徴である、毎年のように生じる法改正にも対応できるよう、できるだけ普遍的な記述を心がけた。特に社会保険料や各種年金や手当等の給付額は、毎年数字が変わることもあり、参考程度に側注に記述するととどめ、実際の数字は各自調べていただけるようにも工夫した。学習に必要な情報、すなわち、自分にとって有益な情報は、自分で取りに行くクセも身につけて欲しいからである。

本書は、全16章で構成する。各章の内容は、社会人として働き（1章）、家族を形成して子育てをし（3章、4章、5章）、ときに病気やケガをし（2章）、障害を負い（7章）、働けなくなり（6章）、困窮する事態（9章）を経て、高齢期を過ごすまで（10章、11章、12章）というふうに、ライフステージに即して構成した。

近年、日本国内で増加している外国人と社会保障法のかかわりや将来国外で働く場合の社会保障法についても記述した（8章）。また、ライフステージにおいてかかわることがあるかもしれない社会保障法に登場するさまざまな人や機関（13章）についてもまとめて記述した。さらに、14章は、社会保障法が時代や社会の変化にどのように変遷したのかについて学びながら、これからの社会保障法を考えるための章となっている。

法律や制度ごとに理解したい場合には、それぞれ本文中に他の章へのリファレンス（➡）が付いているので、必要に応じて、いくつかの章をたどりながら読んでいただきたい。

本書は上記のように、やや変則的な構成となっているので、本書を執筆してください

る先生方には編者の編集方針に従って、執筆内容の調整のほか、記述内容の工夫等、多大なるご協力をいただいた。この場を借りてあらためて御礼申し上げたい。

最後に、法律文化社の梶原有美子氏、梶谷修氏、畑光氏にはさまざまな困難な状況の中、刊行までともに走り、支えていただいたことを感謝申し上げる。

2025年4月

編者 三輪まどか・廣田久美子